



TITLE:

資金の活動に於ける重複性

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

CITATION:

小島, 昌太郎. 資金の活動に於ける重複性. 経済論叢 1936, 42(3): 555-569

ISSUE DATE:

1936-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130752>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第三號

第十四卷

昭和十一年三月一日發行

論叢

宗教團體と課税

法學博士 神戸正雄

勞銀理論の破綻

文學博士 高田保馬

税制整理の目標

經濟學博士 汐見三郎

時論

資金の活動に於ける重複性

經濟學博士 小島昌太郎

經濟更生論

經濟學博士 蜷川虎三

研究

ナチス革命前に於ける獨逸の社會費

經濟學士 中川與之助

私設工場委員會の構造形態

經濟學士 大塚一朗

中立貨幣政策に就いて

經濟學士 中谷 實

說苑

企業の立場からする市場の研究

經濟學士 祭原光太郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

資金の活動に於ける重複性

小島 昌 太 郎

一

資金なるものは、現金の形態に於ても存在し、また銀行預金としても存在し、更に金銭信託、郵便貯金、保険積立金、無盡掛込金などの形態に於ても存在する。資金が現金の形態に於て存在するときは、重複的に存在することはなく、また重複的に活動することもあり得ない。併し、それが、現金以外の形態をとるときは、重複的に存在し得ることゝなると共に、重複的に計算せらるゝ可能が多くなり、また、重複的に活動するの可能も増加することゝなる。

こゝに資金の活動に於ける重複性といふは、資金なるものが、その存在に於て重複性をもつばかりではなく、活動に於ても、二重三重にも用ゐられ得るものであるといふ、その性質を指摘するのである。

資金の活動に於ける重複性なるものは、一般には、資金が、銀行預金の形態に於て存するとき

にのみ存在する。資金が現金の形態に於て存するときには、その存在に於てもその活動に於ても重複性はなく、たゞ單一なる存在と活動とをなすに過ぎない。資金が、金銭信託、郵便貯金、保険積立金、無盡掛込金などの形態に於て存するときは、その存在に於ては、重複性があるけれども、その活動には重複性がない。然るに、資金が、銀行預金として存在するときは、常にその存在に重複性があるばかりではなく、その活動にも重複性があるのである。

現金なるものは、具體的有形の存在であるから、それが一人より他人に渡されたるときは、交付者の手許には無くなり、受領者の手許にあるに過ぎないこととなる。具體的有形の物體は、物理的に、重複的存在が不可能なるからである。

然るに、銀行預金なるものは、抽象的無形の存在であつて、資金がこの形態をとるときは、それが現金の形態に於て存在するときとは異りたる態様に於て働くこととなるのである。原始的に言へば、銀行預金なるものは、現金の預け入れを本として生じたもので、その當時にあつては、現金の動きに伴はざる預金の動きがなかつたのであるから、これも、その活動は單一性のものであつた。然るに、主として銀行なる金融機關の機能の進歩に伴ひて、金融機構が發達したる今日の先進諸國にあつては、この銀行預金なるものは、それが、抽象的無形の存在であるの故を以て、一方に於ては、現金を離れたる觀念的存在として、活動し得ることとなりたと共に、他方に於ては、一步進んで觀念的に創作せらるゝことゝもなり、こゝにその活動に於て、重複性をもつに

至つたのである。

平易にこれを言へば、例へば、137 の 39632 の番號をもつ百圓の日本銀行兌換券は、一枚より存在せず、また存在し得ない。従つて、それが甲より乙に交付せられたときには、それは乙の手許にあるだけであつて、甲は勿論のこと、その以外の何人の手許にもあるものではない。それゆゑに、資金がこの百圓の兌換券の形に於て存するとせば、それが甲より乙に移る場合には、たゞ甲より乙に移るだけであつて、それと同じ時に他の存在をもつことはあり得ざる所であり、また同じ時に他の何人にも移ることを得るものではない。

然るに、この資金が百圓の兌換券の形態より、百圓の銀行預金の形態に變りたる場合、例へば、甲が、その所有する百圓の兌換券を、その取引銀行に預けたる場合に於ては、甲に於ては、その資金が、兌換券たる形より預金の形に變つて存在するのであり、それと共に銀行に於ては、預りたる百圓の兌換券に於て資金が存在することとなる。すなはち、甲の資金が預金の形をとることによつて、そこに二つの百圓の資金が存在することとなる。一つは、具體的有形的存在たる兌換券として、もう一つは、觀念的無形的存在たる銀行預金として。

次に、また、甲なる預金者より預金として預け入れを受けたる銀行が、その日本銀行兌換券を日本銀行に預け入れたるときは、その兌換券は、日本銀行の手に歸ると共に、その兌換券としての存在はなくなるものであるから、その資金は、日本銀行に於ける預金たる形に於て存在するこ

となる。すなはち、甲が、最初、その取引銀行に預け入れたる百圓の兌換券が、更にその銀行より日本銀行に預け入れられたるときには、もと、甲の手許に於ては、一つの百圓の兌換券として、具體的有形的物體として存在して居つた資金が、全く具體的有形的存在を消滅し、その代りに、甲の取引銀行と日本銀行とに於て、各々、一つづつの百圓の預金として、觀念的無形的の存在となるのである。換言すれば、この場合に於ては、最初、一つの百圓の兌換券の形にあつた資金が、二つの百圓の預金となつて存在することとなる。

かくの如く、資金が銀行預金となつて存在する場合に於ては、それは、常に、預金者の資金たと共に、また同時に、銀行の資金としても存在し、すなはち重複的の存在となる。併し、資金の重複的存在は、資金が銀行預金として存在する場合に限るのではなく、それが、金銭信託、郵便貯金、保険積立金、無盡掛込金としての形態にある場合もこれある所である。すなはち、金銭信託（信託預金）そのものが信託者の資金たと共に、信託者より引渡されたる現金若しくは銀行預金は、信託會社の資金たるのである。

たゞ、資金は、銀行預金たる形にある場合には、特殊の働きをする。すなはち、それは預金のまゝにて支拂に充て得るのである。併し、資金が、金銭信託、郵便貯金、保険積立金、無盡掛込金などの形に於てある場合には、信託者などは、その資金をそれらの形のまゝに於て支拂に充て得るものではない。この點、資金が、銀行預金たると、金銭信託その他のものたるによりて、

甚だしく趣きを異にする所である。従つて、資金は銀行預金の形にある場合には、その存在に於ても、その活動に於ても重複性があるけれども、金銭信託その他の場合に於ては、たゞその存在に重複性があるに止まり、その活動には重複性がないのである。

かくて、資金が、銀行預金として存在する場合には、それは、預金者の資金たると共に、同時に、銀行の資金であるから、重複的の存在たるのみならず、預金者の銀行に於ける預金は、預金の形のまゝにて支拂に充て得るものであるから、預金者の資金としても活動し得ると共に、同時に銀行の資金としても活動し得るもので、すなはち、その活動に於ても重複性があることとなる。例へば、前掲の例の場合に於て、預金者甲の銀行にもつ所の預金は、乙會社の株式若しくは社債の應募のため、預金者に於て、小切手を以てその拂込に充て得るものであり、且つ、甲がそれを以てかゝる方法によりて投資をなしたる場合に於て、その拂込を受けたる乙會社が、その小切手を以て現金の受領をなさざる限りに於ては――、乙會社もその資金を銀行預金のまゝにて存続する限りは――、銀行も亦、その資金を以て、例へば日本銀行所有の公債の購入に用ゐる得るのである。すなはち、前に一枚の百圓の兌換券であつた資金が、銀行に預け入れられ、且つその所有者は替るも銀行預金として存続する限りは、甲の百圓の有價證券と、乙會社の百圓の銀行預金と、銀行の百圓の公債と、この三つの百圓の投資となつて存在すると共に、その活動に於ても、甲の百圓の有價證券の買入れとして活動し、同時に、銀行の公債買入としても活動し、二つの活動を

なし得るのである。資金の活動に於ける重複性といふのは、このことを言ふのである。

二

資金の活動に於ける重複性は、いろいろな形に於て現はれる。今日、我が政府の發行にかゝる謂はゆる赤字公債は日本銀行の引受けにて發行せられ、政府は、それによりて調達したる資金——日本銀行に於ける政府預金——を以て支拂ひに充てるのである。この場合に於て、政府小切手を受領したる會社が、それを自己の取引銀行に預け入れたるときは、それによつて、その會社の預金が出来上ると共に、その取引銀行はまた、その受領したる小切手を日本銀行に呈示し、その支拂を受くることによつて、その銀行の日本銀行に於ける預金が——政府預金より振替へられて——出来上る。そして、この二つの預金は、別々に資金としての活動をする。

例へば、政府の十萬圓の小切手の支拂は、市中銀行に十萬圓の預金と、日本銀行に十萬圓の預金と、この二つの十萬圓の預金を作ることとなるのである。預金者たる會社は、その取引銀行に於ける十萬圓の預金を、自己の事業の經營上、各般の支拂に充つることを得ると共に、それらの支拂金が現金として引出されることなく、そのまゝ受領者によつても亦預金とせらるる限り、預け入れを受けたる銀行は、その日本銀行に於ける預金を以て日本銀行より公債の買入れをなし、謂はゆる公債投資となすことを得るのである。この場合に於て、政府の支拂ひたる十萬圓の

資金が、その活動に於て、二重の働きをして居ることは明かであらう。

尤も、一般の預金者が、その取引銀行にもつ所の預金を、預金のまゝにて支拂ひに充つるときは、銀行全體としては、預金に減少を來すものでないけれども、個々の銀行に於ては、預金者が支拂に充つる毎に、その小切手を呈示する所の他の銀行に支拂ひなすこととなるから、これを固定的なる投資の公債買入れなどに向け得るものでないかの如くに見ゆる。従つて、資金は、預金となることによつて、重複的存在とはなるにしても、この場合には、重複的活動とはなり得ないが如くに考へられないでもない。

併し、預金者が小切手を以て支拂に充てたる場合に於ても、その小切手の受領者が、同じ銀行の預金者なるときは、銀行の預金者よりの預金は動くけれども、日本銀行に於ける預金は動かないのであるから、資金の重複的活動は可能である。また、今日の發達したる金融機構に於ては、——我が國も勿論その一つであるが——多數の銀行が竝立しつゝ、その相互の間に於て、預金者振出の小切手を受授するのであり、従つて、一つの銀行の他の銀行に對する支拂ひは、相手方よりの受領資金によつて相殺せられることとなる。すなはち、實際の手續としては、手形交換所に於ける交換によつて、相互的な決済を行ふのである。この場合に於て、一つの銀行が他の銀行に對して、資金を移動する必要のあるのは、謂はゆる交換尻の金額だけである。交換相殺となる金額は、他行に移す必要がないのであるから、その部分の金額は、日本銀行に於ける預金とし

て不動のまゝに留まる。謂はゞ、この部分の金額は、動中靜を保つものと見ることが出来る。

極めて、大體のことを言ふならば、今日の我が大都會に於ける銀行に於ては、その受授する手形小切手の約三割は、自行宛のものであり、残りの七割は手形交換所に提出するけれども、そのまた二割ばかりだけが交換尻となるのである。従つて、預金者總體に於ては、百萬圓の資金を手形小切手を以て動かすにしても、銀行間に動く資金は僅に十四萬圓ほどと推定し得らるゝのである。すなはち、百萬圓の動中に於て八十六萬圓ほどは靜を保つのである。

かくの如くであるから、銀行は、預金者によつて支拂に充てられざる預金たる資金——動かざる預金——は、公債の買入れその他の投資に向け得るは勿論のこと、預金者によつて支拂に充てらるゝ預金たる資金——動く預金——も、亦現實に於ては、その最大部分を、公債の買入れ、その他の投資に向けることを得るのである。

三

更に銀行預金そのものについて、これを見るも、元來、銀行預金なるものは、重複的構成のものである。例へば、昭和十年十二月末日の全國普通銀行の預金總額は、大藏省調査によれば、九十八億七千三百餘萬圓存在するのであるが、これは、資金の重複したる計上より成るものである。何となれば、同じ調査によれば、同日に於ける全國普通銀行の諸貸出金總額は、六十一億二千

一百餘萬圓あるのであるが、これらの貸出されたる資金は、その借受人より支拂を受けたる人によつて、銀行に預け入れられて、また預金となつて居るからである。すなはち、預金たる資金が、貸出に充てられたる場合に於て、その貸出されたる資金が、また預金となり、また貸出され、また預金となるといふが如く、毎回の貸出に當り、支拂準備に充つる部分を残しつつ、その残額が反復循環して、預金となつて居るからである。

いな、貸出が預金となるばかりではない。銀行の買入れたる有價證券の代價も亦、預金となるものであるから、この關係からも、預金が重複的構成のものとなるのである。例へば、同じ調査に於ける全國普通銀行の手持有價證券の總額、四十二億二千二百餘萬圓のうち、國債と外國證券とを除き、地方債、社債、株式は、十九億三千九百餘萬圓であるが、銀行が、それらの地方債、社債、株式の買入若しくは應募のために支拂ひたる代價は、賣手若しくは、地方自治體、諸會社等によつて、または、それらより支拂を受けたるものによつて、銀行に預金として預け入れられて居る筈である。

ゆゑに、銀行が、預金たる資金を以て、これらへの投資をなしたるとき、その支拂金額は、また預金となつて銀行に戻ることによつて、預金は、重複性のものであるのである。

預金なるものが、かくの如く、重複的構成のものであるといふことは、資金が、預金たる形をとるときに於て、その活動が重複性をもつものなるを最も端的に表現するものといふべきである。

四

資金の活動に於ける重複性は、それが銀行預金たる形に於て存するときに限られる。併しながら、單に資金が、その存在に於て重複性をもつことは、銀行預金たる場合のみに限るのではない。信託、保險、無盡等の金融機關に於て存在するときも、亦これある所である。

最近、某所より發表せられたる資金蓄積高としての調査に、左掲の如きものがあるとして新聞雜誌に紹介せられたが、その合計金額なるものは、前に述べたる所と同じ事情により重複的構成のものである。

資金蓄積高

(單位百萬圓)

	銀行預金	金錢信託	郵便及振替貯金	保險會社 責任及支拂準備金	簡易保險 運用積立金	合計
昭和六年下	一〇、一七四	一、三三八	二、六六六	一、六九二	五三	一六、三三三
七年上	一〇、一五五	一、一九七	二、九四〇	一、八三三	六六	一七、一四〇
七年下	一〇、六九九	一、三三〇	二、六八一	一、八三三	六六	一七、一四〇
八年上	一一、一九九	一、三三三	二、八二九	一、九六六	七〇	一八、三九二
八年下	一一、三三七	一、三六七	二、八八一	一、九六六	七〇	一八、三九二
九年上	一二、八二六	一、四九七	三、〇二六	二、〇三三	八二	一九、七六二
九年下	一二、〇八九	一、五七五	三、〇三四	二、〇三三	八二	一九、七六二
十年上	一二、四〇九	一、六四三	三、一五九	二、〇三三	八二	二〇、九三二
十年下	一二、九〇六	一、七三八	三、一〇三	二、〇三三	八二	二〇、九三二

(備考) 銀行預金中に日銀預金を含まず、保險會社十年度末不明につき前年度分使用

すなはち、銀行預金そのものが、前述の如く重複的構成のものたるのみならず、昭和十年下期末の金錢信託十七億三千八百萬圓や、保險會社の責任及び支拂準備金の二十二億三百萬圓の中には、信託會社、保險會社より、銀行預金として預け入れられたるものも、少額といへども存在する譯であり、またこれら信託、保險の資金は言ふに及ばず、郵便貯金、振替貯金、簡易保險運用積立金を以て有價證券を買入れ、若しくは低利貸付をなしたる場合に於て、それらの有價證券の代金は、賣手によつて、低利貸付金は、借受人より支拂を受けたる人々によつて、銀行に預け入れられたであらうから、その範圍内に於ては、前掲の各項目の資金は、重複的に計上せられたるものなるは明かであらう。

これと關聯して、吾々の特に注意すべきことは、資金の重複的擴大と資本そのものゝ増殖との差別である。今、前掲の表に於て昭和六年の下期末と十年の下期末とを比較せば、こゝに掲げられたる範圍内に於て資金は、實に四十六億圓餘も増加して居る。然し、これを以て直ちに、この僅かに四ヶ年間に我が國の金融資本が四十六億圓増加したと見ることは出來ないのである。何となれば、これらの各種金融機關に於ける資金の増加は、主として、政府の赤字公債の發行に基くものであつて、言はゞ國民的負債が、他方に國民的債權となり、而も、それが資金として、重複的擴大をなしたものであるからである。

五

資金の重複性と關聯する問題に、金融機關の投資餘力といふものがある。金融機關の投資餘力といふものは、言ひ換ふれば、金融機關が、例へば、公社債株券を幾許吸収し得るかの限度のことである。

今、これを銀行預金を本として説明せんに、普通には、銀行自らの資本を別とすれば、一定額の預金と一定額の貸出と一定額の所有有價證券との三者を並べ、前者より後二者を差引きたる殘額を以て、投資餘力と考へられて居る。併しながら、前に述べたるが如く、貸出はそのもの自らが、殆ど同時に預金の増加を惹き起すものであり、また、銀行自身がなす所の有價證券買入應募は、それも預金の増加を惹き起すものであるから、單純に、右の殘額そのものが、投資餘力の限界を示すものと考へることは、甚だ粗漏である。

たゞ銀行が日本銀行より政府公債を買入れるときは、それだけ日本銀行預金を減少するものであり、且つ、銀行のこの買入れに充てたる資金なるものは、今日に於ては前に述べたるが如く、その買入れる公債を曩に政府が日本銀行をして引受けしめたるときに得たる資金そのものゝ移轉したるものに過ぎないのであるから、投資餘力は、この買入れによつて減少することゝなる。

また、外國證券の買入も、國內に既に流入せるものを買入れるのではなくて、これを直接海外

より買入るときは、それだけ資金の流出となるから、投資餘力を減少することとなるは言ふまでもない。

これに反して、府縣市町村等の地方自治體は、普通銀行を公金取扱銀行となして、これに預金をなすものであるから、地方債の發行は、直ちにそれだけ銀行預金の増加となり、自治體の、それによる支拂は、單に預金の移轉を惹き起すに過ぎないものである。従つて、地方債の發行に對して、銀行の應募することは、結局に於て見れば、その投資餘力を減少するものではない。社債株式の應募も亦同様である。

殊に、こゝに最も注意すべきことは、地方債、社債及び株式の新規發行に對して、銀行の應募することは、結局に於ては、その投資餘力を減少することゝならないのみならず、金融界に於けるこれら有價證券の吸取力を高める作用をもつことである。

元來、地方債、社債及び株式が新規に發行せらるゝ場合を見るに、自治體にありては、都市計劃とか、市區改正とかの場合であつて、その資金の少からざる部分が土地買入に用ゐられ、また、社債の新規發行の場合や會社設立の株式發行または増資拂込の如き場合には、鐵道や電鐵、電力會社の場合は言ふまでもなく、製造工業の會社にありても、工場の新設や擴張に用ゐらるゝ土地の買入のために、その資金の少からざる部分が充てらるゝのである。

従つて、かゝる場合には、必ず常に、他方には、土地を賣却するものがある譯であり、それら

の人々は土地賣却代金を自ら銀行預金とするか、然らざれば、有價證券の買入若しくは應募に充てるものである。彼等が、その賣却手取金を銀行の預金ともせず、有價證券の買入れにも充てずして、別の土地の買入れをなしたるときに於ても、第二の土地を賣放ちたるものが、彼等と同じ地位に立つに過ぎない。

それゆゑに、地方債、社債、株式の新規發行の場合に於ては、その手取金が海外に流出せざる限りは、それだけ結局に於て、銀行預金を減少することゝはならないものであり、従つて、銀行の投資餘力を減少せざるのみならず、それらの新規發行そのものが、土地の買入れに充てらるゝ範圍に於て、更にかゝる有價證券の新規發行を可能ならしむるものである。

かゝる形に於て、資金に重複的活動の行はるゝことは、從來、全く見逃されたる所である。

六

これを法律學的に説明すれば、資金が所有權の目的となり得る形態に於て存在するときは、その存在は單一性をもつに止まり、その活動も單一なるより外あり得ざる所であるが、一度、資金が債權そのものゝ形態をとるに至つては、それは常に、その反面に同額の債務を伴ふものであるから、この債權が債務と分離して、活動することは可能となり、債權者は、その債權——例へば預金返還請求權——を、資金として活動せしめ得ると共に、債務者も亦、その債務を破壊せざる

限りに於ては、その債務發生の原因たる所の、債權者より引渡を受けたるものを更に他に引渡すことによつて、第二の債權者となり、その債權を資金として活動せしむることを得るのである。

かくて、第一の債權たる資金は、第二の債權たる資金を生むこととなり、第二の債權たる資金は、更に第三の債權たる資金を生むこととなり、順次に、重複的發展をなすことが可能となるのである。

資金が具體的有形物の形態をとるときは、所有權の目的たる形態にあるものであり、單一性をもつに過ぎない、然るに、資金が抽象的存在たるに至つては、それは債權の形態に於て存するに外ならざるものである。従つて、それは、所有權の目的たるものゝ引渡を原因として成立し得るのみならず、何等の所有權の移轉とは關聯なく、單に、債權と債務との對應的な成立としても出來上ることを得るのである。銀行が、貸出と兩建ての預金を承諾することは、單なる支拂の承諾を與ふるの形に於て貸出を行ふことであるが、かくの如き、預金は、初めから所有權と關聯なく成立したもので、全く觀念的な成立であり、存在である。そして、之れが、重複的に發展し得るものなるは、所有權を基礎としたる資金の場合と異なる所はない。

資金の活動に於ける重複性なるものは、右に述べたるが如きものである。併し前述したる所は、單に、その二三の例示たるに止まり、苟も資金が現金の形をとらず、銀行預金の姿に於て存在する限りは、常に重複的活動をなすものである。その態様は、千差萬別であり、縦にまた横に、金融機關の手を經過するほど、複雑性を増加するものである。金融機構の發達に従つて、最も注意すべき方面は、正にかゝる所にあると言ふべきであらう。

— 一一・二・二一 —